

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

## 教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

(平成19年度 教育課題研修)

### 報 告 書

プログラム名	学校の活性化を促す授業実践リーダー育成のための研修プログラムの開発
プログラムの特徴	学校での授業実践の向上を促すリーダーを育成することを目指して、授業、子ども、研修という3つの領域を設定し、体系的に力量形成を図る研修プログラムを開発するものである。

平成20年 3 月

兵庫教育大学 兵庫県教育委員会

## 平成 19 年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム 実施報告書

### I 開発の目的・方法・組織

#### 1. 開発の目的

子どもの学力に対する不安が広がる中で、教員にはこれまで以上に授業内容を充実させる力量が問われるようになってきている。教員の授業力を向上させるためには、個々の教員の努力のみならず、学校全体で授業実践の向上に取り組んでいくことが重要である。それには、学校において授業実践をリードし、学校の教員全体の授業力の向上を促すリーダーが必要となる。大量の定年退職者が見込まれる状況において、リーダーの育成は急務である。こうした課題に応えるために、本プログラムは、学校全体で授業実践の向上に取り組む、その活性化を促すリーダーを育成するための研修プログラムを開発することを目的とした。

開発を試みた研修カリキュラムの全体構造は、以下の通りである。

授業実践リーダーの育成			
領域	授業	子ども	研修
研修項目	各教科の専門性	子ども理解	研修企画
	授業研究	軽度発達障害の理解と支援	校内研修マネジメント
	教材開発	学級経営	

本プログラムは、3つの内容から構成される。第一は、「授業」に関する研修プログラムである。各教科の授業実践の向上のための力量を育成することをねらいとして、各教科内容の専門性の向上、授業実践の改善、教材開発などを内容とする研修プログラムである。第二は、「子ども」に関する研修プログラムである。学校において授業実践の向上をリードしていくためには、子どもの理解、教師と子どもとの関わり、LD や ADHD などの軽度発達障害の子どもに対する理解や支援、学級経営について、理解を深め、支援の力量を向上させていくことが重要である。第三は、校内研修を組織し、研修を企画する力量を育成するためのプログラムである。学校全体での授業改善に取り組んでいくためには、校内研修を活性化することが欠かせない。そのために、校内研修を組織し、運営する力量を育成するための研修プログラムである。

研修の形態もそのねらいに応じて多様なものを開発、実施していくことを目的とした。すなわち、本学のキャンパスや県立教育研修所などに参集させ、集会的な研修を行うとともに、学校を研修場所として、本学教員や県立教育研修所の指導主事が学校を訪問して行う訪問型の研修も実施した。また、研修の内容も、包括的研修だけではなく、事例的な研修も多く行い、教員の研修に対するニーズに応じた多様な研修を開発していくことも目的とした。

#### 2. 開発の方法

研修プログラムの開発は、以下のように行った。

本学の教員が、これまで学部教育や現職教員を対象とした大学院教育において実施してきた授業、あるいは様々な機会において行ってきた研修を素材として活かしながら、本プログラムにおいて目指す学校における授業実践のリーダーの育成のために必要な研修内容を検討し、原案として作成した。このことは、これまでの経験を点検するという作業となる。また、例えば、校内研修の活性化のための研修のように、これまで大学教員に経験がなく、学部教育、大学院教育でも十分な蓄積があるわけではなかったことから、学校だけでなく企業などでも行われている研修内容も参考にしながら、新しいプログラム開発に取り組んだものもある。いずれにしても、各教員は、学校現場での実践とのかかわりを意識した授業や研修での指導を行ってきたことから、それらを十分に活かしながら、授業実践リーダーの育成のための研修プログラムの開発を行った。大学教員の専門性を十分に活かした開

発を出発点とした。

そしてその原案を下記で述べる組織において、外部の関係者から様々な意見を得て、その意見を基に必要な修正を行い、プログラムの原案を完成させた。

次に、実際に研修を行い、その内容の適否について検証を行った。研修場所は、本学（神戸サテライトを含む。）を会場として行ったものと、小学校に出向いて行う訪問研修として行ったものがある。検証の方法は、受講者によるアンケートを行い、それを踏まえながら各実施者が成果、課題について自己分析を行った。そしてその結果を下記の組織に提示し、外部の関係者からの評価も受けた。以上のようにして、プログラムの開発を行った。

### 3. 開発の組織

兵庫教育大学では、平成19年3月に、現職教員の研修を支援するために本学が行う研修事業のプログラムを開発、実施することを目的として、「兵庫教育大学現職教員研修支援プログラム開発プロジェクト」を組織した。このプロジェクトでは、(1) 現職教員研修の教育内容・方法に関すること、(2) 現職教員研修における教育委員会・学校との連携協力に関すること、(3) 現職教員研修の運営体制に関すること、(4) 担当教員の研修（FD）に関すること、(5) その他現職教員研修のプログラム開発に関すること、以上5点について研究、開発を行うこととなっている。そのために「研修プログラムチーム」を設置し、本学教員、教育委員会および教育センター等関係者、公私立学校等関係者、学校長会等関係者、本学大学院学校教育研究科修了生、によって組織している。

本事業も、この「研修プログラムチーム」において開発を行ってきた。本学教員が作成した研修内容の原案について検討を行い、主として、学校現場のニーズの観点からプログラム開発のための議論を行った。さらに、研修実施後に会議を開催し、実施状況の報告と反省点、改善点などの議論を行った。また、学内では、「研修プログラム」チームの委員の他、研修の実施担当者も加えた会合を持ち、研修内容をさらに議論するとともに、実施に向けた実務的な調整を行った。必要に応じて、県立教育研修所の実施担当者とも会合を持ち、実施に向けた調整を行った。中には、本学教員と県立教育研修所の指導主事とが協働して研修に取り組んだプログラムもある。

以上のような組織的な取り組みを通じて、開発を進めていった。

## II 開発の実際とその成果（別紙「実施講座」のとおり）

### 1. 授業に関する研修

- (1) 特色ある体験活動を生かす道德の時間の授業づくり（渡邊満）
- (2) 授業の「質」を高める指導と評価（佐藤真）
- (3) 実践者と研究者のコラボレーションによる国語科授業づくりセミナー（堀江）
- (4) 身近な例から垣間見る数学の世界（松山）

### 2. 子ども理解

- (1) “かかわり”から教育を見つめなおす（渡邊隆信、宮元、大関）
- (2) 軽度発達障害のある児童・生徒の理解と支援（柘植、宇野、井澤）
- (3) 子どもと学級を見る目を広げる（秋光）

### 3. 研修

- (1) 校内研修の企画と進め方（竺沙）

### Ⅲ 大学・教育委員会連携による研修についての考察

#### 1. 連携を推進・維持するための要点

連携を推進・維持するためには、まず組織をつくるのが大切である。組織をつくるためには、研修に対する考え方、ねらいなど、基本的な理念について共通理解を図ることが欠かせない。

次に連携を進めていく際に必要なことは、大学と教育委員会との調整である。連携を進めていくうえで、いわゆるギブアンドテイクの関係が必要であるが、双方の利害が必ずしも一致しない場合がある。特に財政状況の厳しさが増す中で、費用面での調整は、中長期的な視点を持ちつつ、協議を重ねていくことが必要になるであろう。

また大学の研究者と教育委員会の指導主事との研修に対する見解を十分にすり合わせすることも必要である。これは、大学と教育委員会にとどまらず、大学と教育現場との連携と置き換えて捉えてもよいことであるが、教員のニーズ、実態にどのように向き合って、研修を企画し、実施していくか、その点に関わる認識が常に問題になるところである。教員として必要な力量に関する認識にずれが生じることはよくあることであり、その調整をいかに進めるかを常に意識していくことが必要である。

さらに、連携の基盤といってもよいことであるが、事務組織をつくり、実務的な連絡調整をスムーズに行えるようにすることが重要である。連携には、きめ細かな調整が重要であり、それを担う事務組織の体制を整備することが必要である。例えば、研修を実施する際の受講者数の確認や研修の準備物の確認など、事前に事務的な連絡調整を密にしていけることが大切である。

#### 2. 連携により得られる利点

大学としては、社会貢献の実績としてアピールすることができることである。そのことにより、大学の存在価値を高め、様々な取組みへと発展していく可能性が広がると考えられる。特に、大学が学校現場に深く関わり、様々な情報を得やすくなり、実践的な体験をする機会が広がることが期待できる。第二に、そのことが教員のFDになることが大きな利点になる。連携の経験を持つことは、理論的に考えてきたことが実地で試されることにもなり、成功するかどうかはともかく、そのような経験が大学教員の研究者として、また、大学での授業の実践者としての力量向上につながっていくはずである。

教育委員会としては、研修の多様化、体系化を大学に任せながら図ることができ、より豊富な研修体系を構築することが可能となることが利点である。特に財政事情が厳しくなりつつある状況の中では、連携による費用の節約にもなり、限られた予算の中でかなり豊富な研修講座を提供できるという利点が考えられる。少ない予算で、多様性と専門性を備えた体系的な研修を開発していくことにつながると言えるであろう。

#### 3. 今後の課題等

学校における多忙化がかなり叫ばれるようになり、教員は常に仕事に追い立てられているということをよく耳にする。そういう状況では、研修に出かける、自己学習をする場合でも落ち着いて研修に取り組む時間的ゆとりを確保することが極めて難しくなっているとされている。したがって、そうした学校の実態を十分に踏まえて、研修の実施時期、研修の場所を引き続いて検討していくことが重要である。それとともに、研修内容を教員に伝える工夫も必要である。何が得られるのか、何が学べるのか、大学教員の研修の企画書では十分に伝わらないという傾向がある。受講してみて初めてその意義、必要性を実感できたという感想、意見もある。したがって、連携を進める中で、教員の研修意欲を掻き立てるような工夫をいっそう図っていくことが必要である。

今回の開発事業では、校内研修の活性化のための研修の開発が十分にはできなかった。教員の研修意欲を掻き立てるためにも、さらなる開発に取り組んでいく必要があると考えている。

#### IV その他

##### キーワード

授業実践リーダー 授業 子ども理解 校内研修 国語科授業づくり 数学  
軽度発達障害 学級

##### 人数規模, 研修日数 (回数)

番号	研 修 名	領域	人数規模	研修日数
1	特色ある体験活動を生かす道徳の時間の授業づくり	A	C	A
2	授業の「質」を高める指導と評価	A	C	A
3	校内研修の企画と進め方	C	B	A
4	幼稚園・保育所でのクラスづくり	B	B	C
5	“かかわり”から教育を見つめなおす	B	B	B
6	教師としての成長・発達について考える	A	C	A
7	校務支援システムを使った個別の支援教育計画 (IEP) づくり	A	B	B
8	学校安全教育	A	A	A
9	軽度発達障害のある児童・生徒の理解と支援	B	B	B
10	子どもと学級をみる目を広げる	B	B	B
11	実践者と研究者のコラボレーションによる国語科授業づくりセミナー	A	C	B
12	中高生のためのスピーキングテスト	A	C	B
13	小・中学校教員のための初歩の電気実験入門	A	A	A
14	セッケン膜の数学	A	A	A
15	身近な例から垣間見る数学の世界	A	A	B
16	石ころのおもしろさ	A	A	A
17	選択理科のための分子生物学入門	A	A	A
18	教員のための分子生物学入門	A	A	B
19	グローバルなしらべ学習が簡単にできる機械翻訳の活用	A	A	A
20	「情報とコンピュータ」における新しい授業デザイン2007	A	A	A
21	「技術とものづくり」における新しい授業デザイン2007	A	A	A
22	陸上運動・陸上競技の楽しくて効果的な授業を展開するための指導法	A	A	C
23	指揮法理論の授業への応用	A	B	B
24	小学校 授業改善リーダー研究講座	A	A	C
25	高等学校 教科研修リーダー研究講座	A	B	C

(備考)

領域 : A. 授業                      B. 子ども理解                      C. 研修  
人数規模 : A. 10名未満              B. 11～20名                      C. 21～50名  
研修日数 : A. 1日以内                  B. 2～3日                          C. 4～10日

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
教員研修モデルカリキュラム・開発プログラム

【報告書】

No. 1

開発の実際とその成果

1. 「特色ある体験活動を生かす道徳の時間の授業づくり」講座

○ 研修の背景やねらい

各学校においては、多くの場合体験活動が独立した取組として位置づけられ、道徳の時間との結合は未だ不十分な状況にある。そこで、本講座は、講座参加者が体験活動に積極的意義を持つために必要な道徳授業の開発を行う力量を獲得できることをねらいにおいている。

参加者各自が道徳教材にしたい材料を持参し、それを演習において上記の道徳授業教材とする作業を行った。また、その教材を使った授業指導案も作成してもらった。これによって、資料と同時に指導案が作成され、同時に開発のための力量の修得もできた。

○ 対象、人数、期間、会場、日程、講師

対 象：小・中の道徳担当教員及び10年研修対象教員

人 数：36人

期 間：平成19年8月17日（金）

会 場：兵庫教育大学加東キャンパス

講 師：渡邊 満教授、淀澤 勝治准教授

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

講義：①道徳教育の課題 ②体験活動の意義 ③体験活動を生かすための工夫（2時間）

演習：④資料の作成⑤指導案の作成（3時間）

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
講 義	2	道徳授業と教材の基本的な理解	・①道徳教育の課題②体験活動の意義③体験活動を生かすための工夫・内容 ・プリント 一方的な講義にならないよう討論も入れる。
演 習	3	道徳資料と指導案の開発	・グループに分かれて教材作成、指導案作成を行う。 ・各自持参の材料 ・作成した教材のプレゼン

○ 実施上の留意事項

時間が少ないので、手早く進める。

○ 研修の評価方法、評価結果

アンケートによる。課題については理解が得られた。反面、時間が少なかったとの意見もあった。グループ編成のしかたに工夫が必要。

○ 課題

人数が多すぎた。定員15名にとどめることが必要。グループ編成に工夫が必要、2日間にするものの検討が必要。

No. 2

**開発の実際とその成果**

2. 「授業の『質』を高める指導と評価

－児童・生徒の能力を『量』でしか見れない教師の力量改善に向けて－ 講座

○ 研修の背景やねらい

児童・生徒の確実なる能力形成に資する指導と評価の実践的な方法について理解し、豊富な事例に基づきながら次期学習指導要領で求められる、新しい「能力水準準拠型教育」に対応する授業の具体的な方法を習得する。

本講座は、そのための教師の指導及び評価の具体的な方法について、各学校において教師間の指導と評価に関する研修のあり方についても、具体的な資料に基づく演習を通して理解を深めることをねらいとしている。

○ 対象、人数、期間、会場、日程、講師

対 象：主として小・中・高等学校の教員

人 数：26人

期 間：平成19年11月24日（土）

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：佐藤 真教授

○ 各研修項目の配置の考え方

（講義）基本的な考え方の提示：ポートフォリオの指導方法，ルーブリックの作成方法，モデレーションの実施方法のそれぞれについての基本的な考え方を理解してもらう。

（演習）実態に即した指導・評価案の作成：ルーブリック作成，モデレーション実施のポイントを理解し，作成を通して考えてもらう。

（まとめ）研修の実施：能力形成型学習と能力水準準拠型教育について考え，今後の指導と評価の在り方について，改善策をまとめる。

以上を通じて，各学校における指導と評価について理論的かつ実践的に理解してもらうとともに，今後の能力形成型学習の指導・評価理論であるポートフォリオ指導，ルーブリック作成，モデレーション実施の方法について理解を深めてもらう。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
基本的な指導と評価の理論について	60分	授業を進めていく上で、評価と一体化させた指導の意義とその方法について理解する。	<内容>授業における能力形成，指導と評価の一体化／ポートフォリオの指導方法，ルーブリックの作成方法，モデレーションの実施方法 <形態>講義 <使用教材>講義資料（プリント） <進め方>基本的な考え方をできる限り平易に講義を行う。適宜質問を受ける。 <留意点>授業実践の実態に即し，具体的に分かりやすく話をすることが必要である。
指導・評価計画案の作成	90分	学校の実態に応じた指導・評価計画案を作成すること	<内容>授業における目標の検討，授業実践の分析を行い，それに基づいて指導と評価の実際について考え，実際に指導・評価計画案を作成

		のできる方法を実践的に習得する。	<p>する。作成した計画をグループでお互いに紹介し、その内容について議論を行う。</p> <p>&lt;形態&gt;演習</p> <p>&lt;使用教材&gt;パワーポイント、演習資料（プリント）</p> <p>&lt;進め方&gt;4, 5名のグループを作り、グループごとに協議を行う。まずは、個人で計画案を作成し、その後にグループ内で協議を進めていく。</p> <p>&lt;留意点&gt;来年度からすぐにでも使えるようにするため、実態を踏まえた内容となるようにアドバイスをすることが必要である。適宜、受講生と言葉を交わし、一緒に考えることも必要となる。</p>
演習のまとめ	30分	演習で体験したことをもと、各学校で指導と評価の研修で実施する際の重要点と留意点を理解する。	<p>&lt;内容&gt;指導と評価の実践的な研修として、各学年部内や各教科部内等での場面あるいは全校的な研修会を想定し、実際の指導と評価に関する力量を身につけることをねらいとする。</p> <p>&lt;形態&gt;講義</p> <p>&lt;使用教材&gt;講義資料（プリント）</p> <p>&lt;進め方&gt;基本的な考え方のまとめをできる限り平易に語り講義を行う。適宜、質問を受ける。</p> <p>&lt;留意点&gt;各学校の実態に即して、具体的に分かりやすく話をすることが必要である。演習と理論とを整合させて理解できるように丁寧に説明する。最終的な質問や疑問点を総括して受ける。</p>

○ 実施上の留意事項

各学校の実態や児童・生徒の実情を理解し、具体的且つ実践的に話をすることが重要である。授業の具体に即して指導と評価の方法について理解を深めるためには、演習での児童・生徒の本物の資料や教師が実際に使用した指導・評価計画等が説得力をもつものであることから、予めこれらの収集とその活用を図る創意工夫が必要である。なお、演習に際しては、実際の現場教員による実践事例はリアルであり、演習には最も有効であると感じたので、資料のみならず人材のストックも必要である。

○ 研修の評価方法、評価結果

受講生によるアンケートは28名中22名の回収で79%であった。主なものとしては、「動機に合っていたか」は「全くそうだ」「そうだ」が22名全員であった。ただ、「開設時期は適切か」は「どちらともいえない」が8名おり、検討を要する。他の結果はおおむね良好であり、「教科、情報の評価に大変役立つ内容でした。評価もチームプレーだということを改めて気づかされました。」「ポートフォリオ、ルーブリック、モデレーション等、聞き慣れない言葉であって敬遠してきたが、よくわかる内容でした。これからは、もっと積極的に関わっていく自信ができました。」等の自由記述をいただいた。結果として最も良かった点は、「明日からの意欲が持てる内容」「やる気がわくものでした。」等、現場の先生方のモチベーションの向上の感想をいただいたこと。

なお、演習の時間の不足については、今後さらに改善する余地があると感じた。



○ 課題

学術的な成果としてのポートフォリオ、ルーブリック、モデレーション等を、如何に平易にかつ実践的に現場の日々の授業の実際と結び付けて講義するのかということについては、今後更なる研究が必要である。

No. 11

### 開発の実際とその成果

#### 3. 「実践者と研究者のコラボレーションによる国語科授業づくりセミナー

ー授業びらき・授業つなぎ・授業おさめー」講座

##### ○ 研修の背景やねらい

学校の自律性を高めるには、教師自らの創意工夫により、特色ある学級づくりを進めなければならない。そのためには、具体的な授業実践に関する研修が活発に行われることが重要である。その研修は、与えられた研修ではなく、子どもたちや地域の状況に応じて、教師が主体的に工夫を凝らし、取り組んでいくことが必要となる。

本講座は、教師が、主体的に工夫を凝らした国語科授業実践を展開するには、どのようにすればよいかについての提案を行なう。

同時に、このセミナー自身が、自分たちが学校において研修をいかに企画し、実施していけばよいか、研修の企画、実施のあり方について理解を深めてもらうことをねらいとしている。

##### ○ 対象、人数、期間、会場、日程、講師

対 象：小学校教員

人 数：34人

期 間：平成19年8月23日（月）～8月24日（水）2日間

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：堀江 祐爾教授（兵庫教育大学）、伊崎 一夫教諭（三田市立けやき台小学校）

##### ○ 各研修項目の配置の考え方

（導入）基本的考え方の提示：校内研修の基本的な指針となる〈よりよい授業づくりのための5つのポイント〉を示し、目的、授業実践マネジメントについて基本的な考え方を理解してもらう。

（授業実践ビデオ放映と解説）国語科授業実践のあり方を具体的に示すために、授業実践ビデオを放映し、実践者と研究者が協力し合いながら、その意味を解説。もちろん、参加者からの質問を受け、それに答える時間も用意した。

（演習）演習的な展開として、ペアでの「伝え合い」の時間を設定した。次々とペアが変わっていき、参加者同士の情報交換の場となった。

以上を通じて、国語科授業実践を理論的に理解してもらうとともに、今度は自分たちが研修計画作成を行うときの方法について理解を深めてもらう。

★セミナー（1）1日目 午前 ※このセミナーの授業びらき

〈よりよい授業づくりのための5つのポイント〉と〈授業びらき〉

★セミナー（2）1日目 午後 ※このセミナーの基礎基本

〈授業づくりのための5つのポイント〉と〈授業びらき：活用型学習としての言語事項〉

★セミナー（3）2日目 午前 ※このセミナーの 授業づくり

〈授業づくりのための5つのポイント〉と〈PISA型読解力にもとづく授業づくり〉

★セミナー（4）2日目 午後 ※このセミナーの授業おさめ

〈5つのポイント〉と〈2学期の学期（授業）びらき・授業おさめ〉

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
セミナー(1) 1日目 (24日(金)) 10時～13時 提案・質疑・ 討議	3	校内研修の基本的な指針となる(よりよい授業づくりのための5つのポイント)を示し、目的、授業実践マネジメントについて基本的な考え方を理解してもらう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5つのポイントのおさえ→テキストと実践をつなぐ</li> <li>【ビデオ:1年生の最初の1日】</li> <li>【ビデオ:6年生の最初の1日】→他の学年も適宜はさむ。</li> <li>【ビデオ:「たりたりスピーチ」】→テキストにおいて取り上げた実践</li> <li>・堀江基本資料(よりより+伝え合い)</li> <li>・資料「習得型・活用型・探究型学習」</li> <li>・資料「全国学力学習調査」A問題</li> </ul>
セミナー(2) 1日目 (23日(木)) 14時～17時 提案・質疑・ 討議	3	演習的な展開として、午後の枠にペアでの「伝え合い」の時間を設定した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>※参加者が持ち寄った実践事例の紹介を適宜はさむ。</li> <li>○「ひらがなポートフォリオ」→テキストにおいて取り上げた実践</li> <li>【ビデオ:「めあて」「赤丸・黒丸」「口八丁手八丁】</li> </ul>
セミナー(3) 2日目 (24日(金)) 10時～13時 提案・質疑・ 討議	3	国語科授業実践のあり方を具体的に示すために、授業実践ビデオを放映し、実践者と研究者が協力し合いながら、その意味を解説。もちろん、参加者からの質問を受け、それに答える時間も用意した。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○「PISA型読解力」とはどのようなものであるか。→テキストに取り上げた内容</li> <li>・東京大学での講演資料…「森林のおくりもの」「大草原の小さな家」「共生のプリント」</li> <li>・「ごんぎつね」本文</li> <li>【ビデオ:共生のプリント】</li> <li>・資料「6年生の本の紹介活動:日国ワークショップでの資料」</li> <li>・資料「全国学力学習調査」B問題</li> <li>資料「お話し紹介カード」のよさみつけ</li> </ul>
セミナー(4) 2日目 (24日(金)) 14時～17時 提案・質疑・ 討議	3	国語科授業実践を理論的に理解してもらうとともに、今度は自分たちが研修計画作成を行うときの方法について理解を深めてもらう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>※参加者が持ち寄った実践事例の紹介を適宜はさむ。</li> <li>【ビデオ:始業式の授業をどのように展開するか】→2学期に向けて</li> <li>・資料「夏休みの宿題評価プリント」→ビデオにプリント例が出てきます。それをヒントにこれをみなさんに作成していただくようしましょう。本当に数日後に使えるように。</li> </ul>

○ 実施上の留意事項

- ・「研究者と実践者のコラボレーション」という名称が偽りにならないように、理論と実践とをできるだけうまく配合しようとした。
- ・授業実践ビデオを使って、具体的な事例から始め、それを理論に結びつけるように

した。

○ 研修の評価方法，評価結果

次のようなことがらを総合して評価をおこなった。

- ・各セクションにおいて、「伝え合い」の時間を持ち，その様子を観察した。
- ・質疑応答の時間を持ち，理解度を確認した。
- ・小さな課題をいくつか用意し，作業をおこなってもらった。
- ・全員が評価規準を満足したと判断した。

○ 課題

・内容が濃すぎたかもしれない。暑い時期でもあるので，もう少しゆっくりと展開した方がよいと思うが，こちらも伝えたいことがあり，その辺のかねあいが難しい。

・伊崎教諭，堀江の研究仲間の人たちが多くいたため，レベルが高い話題が続き，一部の人たちがそれについてくるのに苦心されていた面があったようである。

No. 15

**開発の実際とその成果**

4. 「身近な例から垣間見る数学の世界—ペル方程式と3角形の不思議な関係—」講座

○ 研修の背景やねらい

小学校から中学校, 高等学校まで3角形は数学の教科書に頻繁に現れます。この研修のテーマは「3辺の長さが連続する整数で面積も整数である3角形を見つける」こと, およびその考察を通して数学の楽しさを伝えることのできる教材開発の一助となることです。辺の長さを3, 4, 5 とすると面積が6 になりますが, それ以外にこのような3角形を見つけることは容易ではありません。このような3角形にヘロンの公式を適用するとペル方程式  $x^2 - 3y^2 = 1$  の自然数解で,  $x$  が奇数, かつ  $(x+1)/2$  が平方数であるものが見つかります。逆にこのような自然数解から辺の長さが連続する整数で面積も整数である3角形を見つけることができるのです。これらのことをふまえ, ペル方程式  $x^2 - 3y^2 = 1$  の自然数解で  $x$  が奇数, かつ  $(x+1)/2$  が平方数であるものをすべて見つける方法を説明し, それらの解が  $(7+4\sqrt{3})^k$  を展開して得られることを導きます。「3辺の長さが連続する整数で面積も整数である3角形」が  $(7+4\sqrt{3})^k$  から生み出されるのです。素朴な疑問がペル方程式を経て  $(7+4\sqrt{3})^k$  に帰着される過程に“数学する楽しさ”を満喫できます。

○ 対象, 人数, 期間, 会場, 日程, 講師

対 象：小・中・高等学校教員  
 人 数：7人  
 期 間：平成19年8月8日（水）～8月9日（木）2日間  
 会 場：兵庫教育大学加東キャンパス  
 講 師：松山 廣教授

○ 各研修項目の配置の考え方

素朴な問題から自然に数学の世界に入っていきようにした。

- (1) 問題の導入。
- (2) ペル方程式  $x^2 - 3y^2 = 1$  の解法がこの問題解決に必要であることを認識。
- (3) 一般のペル方程式の解法, 連分数を用いた最小自然数解の見つけ方へ展開。

○ 各研修項目の内容, 実施形態（講義・演習・協議等）, 時間数, 使用材料, 進め方資料を準備して配布した。

研修項目	時間数	目 的	内容, 形態, 使用教材, 進め方等
講義1	90分	問題導入とペル方程式	「3辺の長さが連続する整数で面積も整数である3角形を見つける」問題がヘロンの公式によりペル方程式に帰着されることを説明する
講義2	90分	$x^2 - 3y^2 = 1$ の解法	ペル方程式 $x^2 - 3y^2 = 1$ の自然数解がすべて最小自然数解 $3+2\sqrt{3}$ から得られることを説明する。
講義3	90分	問題の3角形をすべて見つける	$x^2 - 3y^2 = 1$ の自然数解で $x$ が奇数, かつ $(x+1)/2$ が平方数であるものはすべて $(7+4\sqrt{3})^k$ を展開して得られることを導く。

講義4	90分	一般のペル方程式の解法	一般のペル方程式の最小自然数解を連分数展開を用いて計算する方法を説明する。
-----	-----	-------------	---------------------------------------

○ 実施上の留意事項

中学校教員4名，小学校教員1名，高等学校教員1名であることを考慮し，研修のテーマが理解できるようヘロンの公式なども含め，すべての用語と定理を講義中に説明するようにした。

○ 研修の評価方法，評価結果

履修生に対する評価は行っていないが，質問を促すなどその反応には配慮した。素朴な疑問がペル方程式を経て  $7+4\sqrt{3}$  に帰着される過程は面白く感じてもらえたという感触がある。当初予定していた連分数展開の基本事項については履修生の反応をみて取りやめにした。講義のなかで言及した開平アルゴリズムなどについて興味を示す履修生が複数いたのでその説明を追加した。

○ 課題

ペル方程式の解法の説明から連分数展開の一般論に発展していく時点(この先の部分は難しい)で履修生の息切れを感じたので，確認したところ，もうこの辺で十分とのことでした。残った時間を学校数学と関係深そうな話題(コンパスのみでの作図問題)に切り替えました。これは興味をもって聞いてくれました。研修講座の内容や時間にもよりますが，数学の世界に深入りするよりは，なるべく学校数学に密着した範囲の内容にした方がよいようです。

No. 5

**開発の実際とその成果**

5. 「“かかわり” から教育を見つめなおすー教育コミュニケーションの理論と実践ー」 講座

○ 研修の背景やねらい

教育の基本は教師－生徒，生徒－生徒，教師－教師といった人間同士のコミュニケーションに求めることができる。本講座では，教育におけるコミュニケーションが，他の社会領域でのコミュニケーションと比べてどこが同じでどこが違うのか，教育場面での望ましいコミュニケーションとはどのようなものなのか，といった問題について，教育学と心理学の幅広い視点から考察することをねらいとする。教育実践の場面ですぐに使えるコミュニケーションのスキルを習得するばかりでなく，コミュニケーションの基本的問題をじっくりと検討することを通して，普段の勤務のなかではゆっくりと考えることができないような，教育の本質，学びの原点，人間の成長について探求する。

○ 対象，人数，期間，会場，日程，講師

対 象：小・中・高等学校教員

人 数：17人

期 間：平成19年8月21日（火）～8月22日（水）2日間

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：渡邊 隆信准教授，宮元 博章講師，大関 達也講師

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

学校教育場面におけるコミュニケーションの様態と背景は多様かつ複雑である。本講座ではまず，グループ活動を取り入れながら，学校でのコミュニケーションの何が問題か，何ができるのかについて総論的に議論し，その上で，教師－生徒のコミュニケーションに焦点づけながら，「語る－聴く」と「待つ」という2つの観点から，教育コミュニケーションの原理的問題について各論的に考察することにした。

○ 各研修項目の内容，実施形態（講義・演習・協議等），時間数，使用教材，進め方

研修項目	時間数	目 的	内容，形態，使用教材，進め方等
教育コミュニケーションの現状と課題	4時間	学校教育場面におけるコミュニケーションの問題点を整理するとともに，それらを解決するための手がかりを明らかにする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：現代の学校教育の困難さを記録したドキュメンタリー番組を視聴したのちに，3グループに分かれて議論し，最後に全体で観点を出し合う。</li> <li>・実施形態：ワークショップ形式</li> <li>・使用教材：NNNドキュメント'06「子どもたちの心が見えないー教師17年目の苦悩ー」</li> <li>・進め方の留意事項：受講生全員が積極的に議論に参加することができるようにする。</li> <li>・その他</li> </ul>
教育コミュニケーションにおける「語る－聴く」	2時間	教師－生徒の関係を「語る」と「聴く」という観点から考察することを通して，大人中心	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：教育的行為を支える三つの関係（権力関係，相互主体的関係，倫理的関係）について検討する。</li> <li>・実施形態：講義形式</li> <li>・使用教材：大村はま『新編 教えるというこ</li> </ul>

		でもなく、子ども中心でもない、双方向的な教育のあり方について考える	と』筑摩書房，1996年，鷺田清一『「聴く」ことの力』TBSブリタニカ，1999年他 <ul style="list-style-type: none"> <li>・進め方の留意事項：教育実践場面を想定して具体的事例をあげながら理論的な考察を進めるとともに，講義の途中で受講生が議論する機会をもうける。</li> <li>・その他</li> </ul>
教育コミュニケーションにおいて「待つ」ということ	2時間	子どもの学習活動の指導において教師が待つことの困難性と重要性について理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：近代学校における二つの時間（客観的時間，主観的時間）の相克について歴史的に整理し，主観的時間を充実させるための方策を検討する</li> <li>・実施形態：講義形式</li> <li>・使用教材：M.フーコー『監獄の誕生』新潮社，1977年，鷺田清一『「待つ」ということ』角川書店，2006年他</li> <li>・進め方の留意事項：教育実践場面を想定して具体的事例をあげながら理論的な考察を進めるとともに，講義の途中で受講生が議論する機会をもうける。</li> <li>・その他</li> </ul>

○ 実施上の留意事項

3人の講師による講座であったため，事前に数回会議をもって，研修の目的や方法について共通理解を図るとともに，講座当日は他の講師の担当部分も参加して2日間の流れをつかんでおくようにした。とりわけ，講座の初日のワークショップと2日目の講義の内容に関連性をもたせることに留意した。

○ 研修の評価方法，評価結果

講座終了後に，本学所定のアンケート用紙にて受講生から感想や意見，要望を記述してもらった。「研修講座全体の評価としては，期待通りでしたか」という設問（5段階評価）については評点4.1で，ほぼ期待通りであったという評価が得られた。自由記述からは，受講生の校種が多様で人数が適切であった点，ワークショップや討論などにより受講生の参加と相互交流を促した点などについて肯定的な評価が得られる一方で，受講生の座席配置や講師の声の大きさなどについて改善すべき点も指摘された。

○ 課題

初日にドキュメンタリー番組をもとにワークショップをおこない，2日目は初日の議論に立ち返りながら2コマの講義をおこなった。初日に共通の番組を見ていることにより，2日目は教育実践の具体的な場面を想起させながら講義を進めることができた。今後は，ワークショップと講義の関連性を強め，2つの形式でおこなうことの相乗効果をさらに図る必要がある。2日間のタイムスケジュールについても，内容に応じてもう少しゆとりをもたせる工夫が求められる。



(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
**教員研修モデルカリキュラム・開発プログラム**

【報告書】

No. 9

**開発の実際とその成果**

6. 「軽度発達障害のある児童生徒の理解と支援」講座

○ 研修の背景やねらい

平成19年度より、特別支援教育が本格化実施となっている。特別支援教育は、従来の障害児教育（特殊教育）の対象となる障害だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症等（「軽度」の発達障害）を含めた障害のある児童・生徒への個に応じた教育的支援の充実がさげられている。LD、ADHD、高機能自閉症等のある児童・生徒は、全般的な知的発達通常レベルにあるため、通常学級において教育を受けることになる。その通常学級内の「軽度」の発達障害のある児童・生徒への対応は、多くの問題が生じているのが現状であり、軽度発達障害のある児童・生徒に対する教育的支援に関する知識・技能を有する教員を養成することは重要なことである。そこで、本研修では、軽度発達障害のある児童・生徒に対する理解と教育的支援に関する実践的な知識・技能、特に、「WISC-Ⅲ知能検査」と「個別の指導計画」について学習することを目的とする。

○ 対象、人数、期間、会場、日程、講師

対 象：幼稚園・小学校・中学校の担任、特別支援学級担任、特別支援学校教員

人 数：19人

期 間：平成19年8月20日（月）～8月21日（火）2日間

会 場：兵庫教育大学加東キャンパス

講 師：柘植 雅義教授、宇野 宏幸准教授、井澤 信三准教授

牛山 道雄講師(京都教育大学)、松原 弘治(熊本県庁)

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

夏期休業中の2日間といった比較的余裕のある時間に取り組む課題として「WISC-Ⅲ」についての理論・内容理解、また昨今その作成が求められている「個別の指導計画」について、各学校において作成している「個別の指導計画」のフォーマット・作成手順・時期・方法等について見直しすることに多くの時間をあてることとした。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
1日目			
軽度発達障害（LD、ADHD、高機能自閉症等）概論	90分	LD、ADHD、発達障害に関する基本的な障害特性と支援方法について知識を獲得することを目的とする。	（講義形式） 通常の講義スタイルにより実施。プレゼンテーション・ソフトにより提示し、説明を行う。プレゼンと同様の内容を資料として配付する。
WISC-Ⅲ実習	180分	発達障害のアセスメントとして、最も使用されるWISC-Ⅲについて知り、実際の内容までを体験することにより理解する。	（講義形式） WISC-Ⅲについて、理論的背景、および検査方法・内容・結果の解釈の仕方について、プレゼンテーション・ソフトにより提示し、説明を行う。 （実習形式） 2名1組になり、実際のWISC-Ⅲの検査用具を使用し、検査者および被検者をお互いに交代しながら

			ら、全ての検査課題を実施する。それを通して、検査方法・内容を体験する。最後に振り返りの時間を設定する。
2日目			
学校教育での支援の実際	90分	学校現場での発達障害への支援の実際、校内委員会、保護者との連携、特別支援教育コーディネーターの役割などを知る。	(講義形式) 通常の講義スタイルにより実施。プレゼンテーション・ソフトにより提示し、説明を行う。プレゼンと同様の内容を資料として配付する。
個別の指導計画の作成	180分	個別の指導計画の実際を知り、現状から改善案を考える。	(演習形式) 各受講生が、実際に作成し、活用している個別の指導計画を1つ持ち寄り、それぞれの良さや修正点を明らかにし、他の受講生の「個別の指導計画」をも参考にしながら、理想的な指導計画のあり方をディスカッションし、すでに作成し活用している「個別の指導計画」の具体的な改善(バージョンアップ)を行う。

○ 実施上の留意事項

2日間、受講生の情報交換、交流する機会も確保しながら、実施していく。

- ・1日目の「WISC-Ⅲ」の演習では、知能検査の目的、内容、実施手続き、解釈(プロフィールの見方)について知ることをポイントとする。
- ・2日目の「個別の指導計画の作成」では、①誰が、いつ、作成しているか(作成の手続き)、②書式について(盛り込むべき内容)、③学校内の引き継ぎ等での使われ方(活用の仕方)、④保護者の参加の仕方、⑤管理の仕方(個人情報の保護)、⑥個別の指導計画と個別の教育支援計画、をディスカッションのポイントとする。

○ 研修の評価方法、評価結果

アンケートによる評価を受講生に実施した。その結果、おおむね、受講生のニーズに応えることができている。発達障害支援における知識・技能の習得ができており、また、今後の特別支援教育に対する意欲にもつながっていると評価できる。

○ 課題

本研修は、年1回を継続し、今回で4回目を迎える。4年前と比べれば、学校における特別支援教育の理解も年々着実に積み重なってきている。実際にも、特別支援教育の研修も受ける機会が増えてきている状況もある。また、受講する教員によって、これまでの発達障害のある児童・生徒との関わりの経験や学校・地域による差なども大きくなっており、年々個々のニーズが多様化している。この研修が多様なニーズの中で、どのようなニーズに応えていくことができるか、研修内容を年々検討していく必要がある。

No. 10

## 開発の実際とその成果

### 7. 「子どもと学級をみる目を広げる」講座

#### ○ 研修の背景やねらい

本研修講座は、学校の活性化を促す授業実践リーダー育成のための研修プログラムとして開発されたものであり、特に、子ども理解の促進と学級経営の力量向上に資するものである。教師として子どもたちを指導する中で、児童・生徒理解は不可欠のものと言えよう。しかし近年の学校現場では「子どもが理解できない」といった悩みがしばしば聞かれ、その一因として「子どもが変わった」という指摘もある。

一方、人は誰でも「他者に対する自分の視点（枠組み）」には気が付きにくいものであり、そのことは教師も例外ではない。教師が児童・生徒をありのままに理解しているつもりでも、自分でも気が付かないうちに偏りのある見方や固定した枠組みによって子どもを評価している可能性がある。つまり「子どもが理解できない」ことには、教師自身が固定した枠組みのみによって子どもを把握しようとしているために、その枠組みから外れた子どもを「理解できない」と形容してしまっているとも考えられる。つまり、児童・生徒理解のためには、教師自身が自らの「子どもをみる目」を客観的に理解することも重要であると考えられる。

そこでこの研修講座では、教師用RCRTという方法を用いて、教師自身が普段、どのような視点（枠組み）で児童・生徒をみているのかを振り返る機会を提供する。児童・生徒や学級に対する自分の視点に気付いたうえで、それが児童・生徒と自分自身との関係や学級経営にどのような影響を及ぼしているのかについて理解し、よりよい学級づくりを考えていくことが、この研修講座の目的である。

#### ○ 対象、人数、期間、会場、日程、講師

対 象：現在、学級担任をしている小・中・高等学校の教員

人 数：11人

期 間：平成19年8月7日（火）、8月9日（木）2日間

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：秋光 恵子講師

#### ○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

上記のねらいにあるように、本研修講座の主たる目的は教師用RCRTという方法を用いて、研修の参加者自身に担任学級の児童・生徒に対して自らが有している視点を客観的に把握させ、それを学級経営に活かす手立てを考えてもらうことである。そこで、2日間の研修講座全体を4つのセッションに分割し、最初のセッションで教師用RCRTを実施した。第2セッションではグループワークを取り入れながら、教師が偏りのある見方や固定した枠組みで子どもを評価している可能性についての理解を深める講義を行った。2日目となる第3セッションで教師用RCRTの個別結果をフィードバックし、第4セッションではその結果を元に、参加者各自の学級経営の課題分析と今後の取り組みについて参加者相互の討論を中心に検討した。なお結果のフィードバックを2日目に行うのは、参加者ごとに個別の統計的分析とフィードバック用紙の作成を必要とするためでもある。

#### ○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
------	-----	-----	-----------------

ワーク1	120分	担任学級の子どもに対する自分の視点を把握する①	教師用R C R Tの実施(研修参加者の個別の作業)
講義1	50分	自分と人との違いや、固定した見方の可能性に気付く	錯視図形や印象形成実験等の心理学的知見を紹介しながら、他者認知の不確かさについて解説(P Pを用いて進行)
ワーク2	60分		・「どんな絵が描けたかな」(グループワーク) ・「いろんな『良い子ども』」(グループワーク)
講義2	30分	担任学級の子どもに対する自分の視点を把握する②	教師用R C R Tの解説(P Pを用いて進行)
ワーク3	80分		教師用R C R Tのフィードバックと結果の読み取り(研修参加者の個別の作業に並行して、講師が机間巡視により個別に助言)
ワーク4	120分	子どもに対する自分の視点と学級経営について考える	各自の学級経営の課題分析と今後の取り組みについて検討(参加者相互の討論を中心に)

○ 実施上の留意事項

教師用R C R Tは参加者各自のペースで実施するが、作業のスピードには参加者ごとに大きな違いがある。そこでこのセッションを午前中におき、昼休憩を挟むことで時間調整を行っている。

○ 研修の評価方法、評価結果

事後アンケートによって評価を行った。「実際の教育実践に生かせる内容だったか」「全体として期待通りだったか」という問いに対する参加者の平均評価(5点満点)は両設問とも4.7であり、概ね好評であったと考える。

○ 課題

希望者には自身の教室での取り組みについて個別コンサルテーションを行う旨を募集の際に表記していたため、希望や問い合わせが数件あったが、実際には実現していない。その理由は主に時間調整の困難さであるが、学級経営に関する教師支援のニーズの高さは感じられるので、今後もさらに現場が利用しやすい研修形態(実施時期、方法等)を開発する必要があると思われる。

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
**教員研修モデルカリキュラム・開発プログラム**

【報告書】

No. 3

**開発の実際とその成果**

8. 「校内研修の企画と進め方ー教職員が主体的に参加できる研修をつくるには?ー」講座

○ 研修の背景やねらい

学校の自律性が求められ、自らの創意工夫により、特色ある学校づくりを進めていくことが重要視されている。そのためには、校内での研修が活発に行われることが重要である。その研修は、与えられた研修ではなく、学校の状況、子どもたちや地域の状況に応じて、学校が主体的に課題を設定し、教員が自ら進んで研修に取り組んでいくことが必要となる。

本講座は、教員が主体的に参加できる研修をいかに企画し、実施していけばよいのか、学校づくりの視点から研修の企画、実施のあり方について理解を深めてもらうことをねらいとしている。

○ 対象, 人数, 期間, 会場, 日程, 講師

対 象：主として小・中・高等学校の校内研修担当教員

人 数：16人

期 間：平成19年8月7日（火）

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：竺沙 知章准教授

○ 各研修項目の配置の考え方

(導入) 基本的考え方の提示：校内研修の目的、組織マネジメントと校内研修について基本的な考え方を理解してもらう。

(演習) 勤務校の実態に即した研修計画の作成：学校全体のあり方からどのようにして研修を企画し、計画していけばよいか、そのポイントを理解してもらう。

(演習) 研修の実施：ロールプレイングによる研修を行い、その進め方について考えてもらう。

以上を通じて、学校づくりの中での校内研修の位置づけを理論的に理解してもらうとともに、研修計画の作成を通じて全体的な企画、計画の進め方、ロールプレイングの演習により、研修の方法について理解を深めてもらう。

○各研修項目の内容, 実施形態(講義・演習・協議等), 時間数, 使用教材, 進め方

研修項目	時間数	目的	内容, 形態, 使用教材, 進め方等
学校づくりにおける校内研修の意義について	60分	学校づくりを進めていく上での校内研修の意義について理解を深める。	<p>&lt;内容&gt;校内研修の目的(校内の教職員の力量向上, 学校が直面している課題の解決) / 組織マネジメントと校内研修(学校における組織マネジメント, 校内研修の位置づけ, 校内研修のための組織マネジメント)</p> <p>&lt;形態&gt;講義</p> <p>&lt;使用教材&gt;講義・演習資料(プリント)</p> <p>&lt;進め方&gt;基本的な考え方をできる限り平易に講義を行う。適宜質問を受け付ける。</p> <p>&lt;留意点&gt;学校経営の実態に即して具体的にわかりやすく話をする必要がある。</p>
研修計画の作成	60分	学校の実態に応じた研修計画を作成するためにポイン	<p>&lt;内容&gt;学校の目指す姿の検討, 学校の現状の分析を行い, それに基づいて重点課題と研修テーマを考え, 来年度の計画という想定の下で,</p>

		トをつかむこと。	<p>実際に研修計画を作成する。作成した研修計画をグループでお互いに紹介し、その内容について議論を行う。</p> <p>&lt;形態&gt;演習</p> <p>&lt;使用教材&gt;講義・演習資料（プリント）</p> <p>&lt;進め方&gt;4, 5名のグループを作り、グループごとに協議を行う。まずは、個人で研修計画を作成し、その後にグループ内で協議を進めていく。</p> <p>&lt;留意点&gt;来年度からすぐにでも使えるようにするために、実態を踏まえた内容となるようにアドバイスをすることが必要である。適宜、受講生と言葉を交わし、一緒に考えることも必要となる。</p>
ロールプレイング	60分	ロールプレイングによる演習を体験し、校内研修で実施するうえでの留意点などを理解すること。	<p>&lt;内容&gt;学校運営に関わる研修として、学校評議員会という場面設定で、保護者や地域住民と議論することを経験し、開かれた学校経営を進める力量を身につけることをねらいとするものである。</p> <p>&lt;形態&gt;演習</p> <p>&lt;使用教材&gt;講義・演習資料（プリント）</p> <p>&lt;進め方&gt;6名で1つのグループを作り、校長、教頭（議長）、（自治会長学校評議）、PTA会長（学校評議員）、保護者（学校評議員）、教職員の役になりきって、学校評議員会の会議を実際に行い、きりのいいところで終了して、議論の流れを振り返り、その中で感じたことを出し合い、意見交換を行う。</p> <p>&lt;留意点&gt;ロールプレイングの進め方を十分に理解できるように、丁寧に説明すること、特に役になりきる大切さを強調して説明することが必要である。</p>

○ 実施上の留意事項

校内研修の実態を把握して、それに即した話をするのが何より大切である。研修の実施者は、ある程度校内研修の実態について情報を得ておくことが必要である。したがって、研修前に、参加者から校内研修の進め方で苦労していることなど、学校の実態について調査しておくことも必要である。

具体的に研修を企画したり、実施したりする演習は有効であると感じたので、ノウハウを伝える工夫が必要である。

○ 研修の評価方法、評価結果

受講生によるアンケート、そして受講生の反応、特に演習での議論の様子から自己評価を行った。

講義は、少し難しそうな反応ではあったが、演習の議論は活発であったので、手ごたえを感じながら研修を行っていた。

アンケートの結果もおおむね良好であり、参考になった、新鮮であったという感想を多くいただいた。ただ、勤務校で直面している問題の解決には至らないという感想も見られ、さらに改善

する余地はある。

○ 課題

校内研修のアイデアをもっと豊富にしておくことが必要である。そのためには、もっと実態把握を行い、様々な校内研修の方法について研究することが必要である。

【問い合わせ】

国立大学法人 兵庫教育大学

総務部企画課

〒673-1494

兵庫県加東市下久米942-1

TEL 0795-44-2053